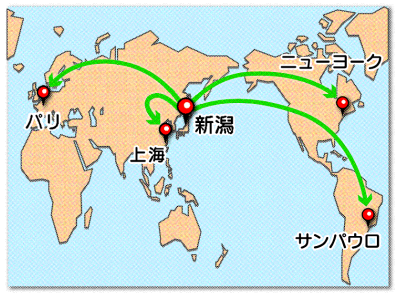
2013年11月04日 新潟日報 朝刊 解説面 007頁　　(C)新潟日報社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

グローバル にいがた　国際交流拠点から

新潟日報社が開設した米ニューヨーク、ブラジル・サンパウロ、中国・上海、欧州（パリ）の国際交流拠点などを通じ、海外で暮らす本県関係者から現地の様子をリポートしてもらい、毎月第1月曜日に紹介します。また、新潟日報ホームページ「モア」にも掲載し、感想や意見を受け付けています。



from 上海

関心高まる日本料理

平岡　治夫さん
＝長岡市出身＝

ふとしたきっかけで上海で仕事を始め、15年がたちます。熱い思いで来たわけではないのですが、日本の新聞の取材を受け、上海で日本料理を広めようとしている日本人の一人として紹介されたことを思い出します。

上海の発展は目覚ましく、同時に収入の増えた中国の若い世代、富裕層と呼ばれる人たちの増加に伴い、日本料理への関心がさらに高まったようです。

街の至る所に日本料理、日式料理、日本風などの看板が見られるようになり、その数は500とも800とも、もっとともいわれています。また、うどん、ラーメン、すし、牛丼など、日本の大手チェーン店の上海展開。この巨大な市場を見れば当然のような気もします。

大きくて厚くて一口では食べきれないすし、十二単のような分厚い衣をまとった天ぷら、氷の中を泳いでいるような刺身、牛肉以外の肉や魚を使った「牛丼」など、中にはとても日本食とは思えないものもありますが、中国受けするなら何でもあり？　これも上海における食文化の流れでしょうか。

こちらに日本の食材がほとんどなかったころは、日本料理に一歩でも近づけようと食材を探し、中国沿岸を旅したこともありました。油揚げや厚揚げがなく、自分で揚げたり、加工して作ったり。〝ない物は自分で作る〟というのが、当時の口癖でした。

今は業者さんの努力もあって、必要な物はほとんど手に入りますが、値段も高く一般の中国人経営の店では採算が合わないので、中国産の材料で、間に合わせているところも多いようです。

しかし、上海の若い調理師も数多く育ってきています。調理技術が向上し、素材を選ぶ目を持った人材が増えています。どこでも日本料理が食べられるようになった今、本当の日本料理の心が失われないようにしたいものです。

（平岡さんは上海の日本料理店「たくみ」の主人です）

上海の繁華街古羊路。立ち並ぶ飲食店の中には日本料理店も多い

from ブラジル

小野塚　淑子さん
＝村上市出身＝

コーヒー 過酷な歴史

生豆の生産量、輸出量ともに世界一を誇るコーヒー大国ブラジル。いうまでもなく、ブラジル人はコーヒーが大好きです。

街を歩けばパン屋やカフェなど、いたるところでコーヒーを飲む人々を目にします。店員が「コーヒー飲んでいかない？」と、声をかけるのもおなじみの光景です。

ブラジルのカフェ。少量の濃いコーヒーに、大量の砂糖を入れて飲むのが主流＝サンジョゼ・ドス・カンポス

ブラジルではコーヒーのことを（朝のコーヒー）と言います。いかにブラジルの生活にコーヒーが根差しているかが分かります。

コーヒーがブラジルに初めてもたらされたのは、172 7年、フランス人のフランシスコ・メロ・パレェタによってでした。彼は北部のパラ州のベレンに苗を持ち込み、家庭用に栽培したといいます。

そこから海岸づたいに広まり、1820年ごろ、サンパウロとリオデジャネイロの間で本格的に栽培が始まったそうです。当時はさびれた地域でしたが、土も気候も、全てがコーヒー栽培に適していたのです。

50年ごろ、ブラジルのコーヒー生産量は全世界のおよそ75％になり、有名なゴールドラッシュよりもブラジルの経済発展に貢献しました。

しかし、88年に奴隷制が禁止されると、その人手を世界の移民に頼ることになります。こうして日系人を含む各国からの移民が、ブラジルをめざし、契約労働者（コロノ）としてコーヒー農園で働くこととなったのです。コロノの生活は賃金も安く、過酷だったといいます。

普段、何げなく飲んでいるブラジルのコーヒーは、奴隷や初期の移民たちによって支えられていたという背景があったのです。コーヒーを口に含むとき、先人たちに敬意を払いたいような気持ちになります。

（小野塚さんは国際結婚をしてサンジョゼ・ドス・カンポスで暮らしています）

from NY

小平　伸浩さん
＝新潟市東区出身＝

9・11の思い3・11に

ニューヨーク（NY）に住みだして、10年たってまもなく2001年9月11日に同時多発テロが起こった。私も家族も多大な影響を受け、それを機に、特にニューヨーカーの「心」の持ち方に、少し変化をもたらしたように感じた。力の論理のベクトルが多様化し、強者の論理だけでない見方も感じるようになった。

内面的な変化は、結婚率や子供の増加、持ち家率の上昇など数字の上でも示された。個人主義の国、その大都市NYで、硬いものから柔らかいものへの転換。それは家族や人々に寄り添うことを大切にし始めた結果であり、現代日本人が捨て去ろうとしていた「声かけ社会」「共有社会」などに価値を見つけ理解しようとした傾向でもある。

また、自然志向、安全な食品など、持続性のあるものにも理解が深まり、「いやし」と呼べるものがクローズアップされてきた。アメリカが痛みの分かる国に変化していっているように思えた。

NYでは現代アートや西洋美術だけでなく、日本では、すでに見られなくなった日本の国宝級の美術品がいくつも美術館、博物館にあり、最高の物を見られる機会と利便性が広く市民に提供されている。戦中戦後のフジヤマ、ゲイシャのような理解力ではなく、そこから逆に現代日本人が捨て去ろうとしている価値を見つけ理解しようとしている方々も出てきた。

そんな社会的・個人的な土壌から、私は和紙アートを通して「人の心に寄り添う」かたちの社会貢献や、社会的な率先もできればと思い制作を始めた。

そして、ちょうど10年後、日本で3・11東日本大震災が起こった。NYでは過去の思いを分かち合い、すぐに「協力」と「共有」が人々に響き、ニューヨーカーは非常に自然に協力活動を行った。私もいくつか関わったが、現在もDesign Saves Lives（人命を救うデザイン）という財団に参加して、デザインが何かの役に立てればと思い活動している。日本が復興に進む中、たくさんのニューヨーカーはいまも思いを続け、エールを送っている。

（小平さんはインテリア和紙の作家で、NYで和紙の企画、制作、販売を行う会社の社長をしています）

NY・マンハッタンの夜景。今も多くのニューヨーカーが東日本大震災の復興に向け、日本にエールを送り続けている

from パリ

三村　兼哉さん
＝新潟市中央区出身＝

八重奏団に心奪われ

「フランス八重奏団」をご存じでしょうか。常時編成している八重奏団としてはフランスで唯一のものと聞いています。いつも八重奏を演奏するわけではなく、四重奏や五重奏などプログラムによって編成を変えています。クラシック音楽好きの方はご存じかもしれませんが、第1バイオリンを務めているのが日本人の長沼由里子さんです。

夏のバカンスの時期はフランスでは、数え切れないぐらいの音楽フェスティバルが開かれます。その一つにパリのブローニュの森にあるバガテル公園のオランジュリーという建物で、7月半ばの週末からひと月にわたって開かれる「室内楽フェスティバル」があります。

そのオープニングと最終日の演奏を行うのが「八重奏団」です。私が初めて聴いたのも4年前の夏、オランジュリーでした。

フランス八重奏団。日本人の長沼由里子さん（左端）が第1バイオリンを務める

その後、「レ・ミゼラブル」などで知られるヴィクトル・ユーゴー原作の「笑う男」という無声映画の上映の伴奏で聴き、とても感動したことを覚えています。

ことしの4月半ばに再び、パリ・カルチェラタンの映画館で、「笑う男」の上映に合わせた「八重奏団」の演奏があると知り、日本から来た知り合い数人を誘って出掛けました。

友人たちは、フランス語もそんなにできません。不安もありましたが、フランス語の字幕の意味は分からなくとも、スクリーンに映し出される映像と演奏のすばらしさで、ストーリーは分かったようでした。

上映が終わって室内が明るくなったら、みんな目を赤くして、「感動した」と言ってくれ、一緒に来てよかったと私も心が温まる思いになりました。この話をパリに来られなかった日本の友人にしたら「私も飛んで行きたい」と言っていました。

まだ見ていない人のために、日本でも何とか実現したいと考えています。

（三村さんは弦楽器商で、新潟・フランス協会パリ支部副支部長です）

第1月曜掲載

新潟日報事業案内

来年3月から新潟市歴史博物館で開かれる「大新潟湊展」を記念したプレイベントを開催します。入場無料。

◆とき　11月24日（日）午後2時～4時30分
◆ところ　りゅーとぴあ能楽堂（新潟市中央区一番堀通町）

松岡正剛講演会「世界は港で変わってきた」

◆内容　①基調講演「世界は港で変わってきた」松岡正剛さん（日本文化研究者）②対談「湊町にいがたの未来」松岡さん、篠田昭新潟市長
◆申し込み　新潟市役所コールセンター、025（243）4894。定員の300人になり次第、締め切ります。
主催　新潟市、新潟市歴史博物館みなとぴあ
共催　新潟日報社、BSN新潟放送

第56回県アマ囲碁段位獲得戦

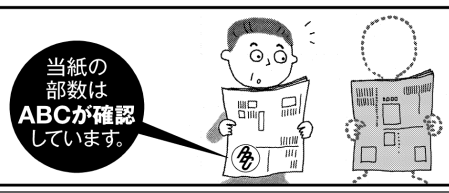
▽初段獲得戦＝11月24日（日）、二段＝12月1日（日）、三段＝12月8日（日）囲碁サロン天元（新潟市中央区東大通）▽四・五・六段獲得戦＝11月24日（日）まちなかキャンパス長岡301（長岡市大手通）※いずれも午前9時受け付け、9時30分開始
◆競技方法　スイスルール5回戦（トーナメント戦を組み合わせる場合あり）、持ち時間各45分打ち切り
◆参加料　▽初・二・三段獲得戦＝一般2000円、高校生1500円、中学生以下1000円▽四・五・六段獲得戦＝一般3000円、高校生1500円、中学生以下1000円（昼食付き）
◆申し込み　はがきに参加段戦、住所、氏名、年齢、電話番号を明記し、▽初・二・三段獲得戦＝〒950－0087、新潟市中央区東大通1の7の8、アイエム第1ビル5F、新潟県囲碁連盟へ▽四・五・六段獲得戦＝〒940－0062、長岡市大手通2の4の4、安達ビル、日本棋院長岡支部へ
◆締め切り　各段戦とも、開催の4日前まで必着。当日受け付けはしません。
◆問い合わせ　新潟県囲碁連盟、025（248）3188

ペットボトルで作ったエコなツリーで冬の街を彩る「万代ロマンチックサーカス」が11月23日から12月25日まで、万代シテイパークで開催されます。それに合わせて、イベントで展示するメディアシップ型オブジェと北前船型「光の船」を作るワークショップを開きます。洗った500ミリリットルのペットボトルを持参して直接、会場にお越しください。参加無料。

ペットボトルオブジェワークショップ

【メディアシップ型オブジェ】
◆とき　11月10日（日）午前11時～午後4時
◆ところ　万代シテイパーク特設大テント（バスセンター2階、新潟市中央区万代）
【北前船型「光の船」】
◆とき　11月17日（日）午前11時～午後4時
◆ところ　新潟日報メディアシップ1階スタジオ（新潟市中央区万代）
※いずれも事前申し込み不要ですが、スペースに限りがありますので、参加者多数の場合は入れ替え制にする場合があります。
◆問い合わせ　読者ふれあいセンター、025（385）7444

ABC部数は
読者が見える数字です。



合理的なマーケティング・広告活動には、正確な部数の確認が欠かせません。
ABCは、第三者機関として新聞・雑誌の部数を公査し、発表しています。
一般社団法人 日本ABC協会 新聞雑誌部数公査機構 Japan Audit Bureau of Circulations
http://www.jabc.or.jp